

漱石全集



漱石全集
第九卷

小品評論
雜篇

KURIBARACHOJI. 1920.

大正九年八月五日印刷
大正九年八月十日發行

漱石全集第九卷 (非賣品)

著作權者

夏目純一

編輯及發行

漱石全集刊行會

右代表者

東京市神田區南神保町十六番地
岩波茂雄

印刷者

東京府北豐島郡巢鴨町三丁目十番地
大久保秀次郎

印刷所

東京市京橋區築地二丁目十七番地
株式會社東京築地活版製造所

目次

小品

京に着ける夕

文鳥

夢十夜

永日小品

元日

蛇

泥棒

柿

火鉢

一

一

九

二九

六三

六三

六六

六九

七六

七九

行列	儲口	紀元節	懸物	霧	火事	モナリサ	山鳥	人間	印象	暖かい夢	猫の墓	過去の匂ひ	下宿
----	----	-----	----	---	----	------	----	----	----	------	-----	-------	----

二

一二八	一二五	一二四	一二一	一一八	一二五	一二二	一〇七	一〇三	一〇〇	九六	九二	八八	八三
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	----

昔

聲

金

心

變化

クレイグ先生

長谷川君と余

滿韓ところへ

思ひ出す事など

子規の畫

ケーベル先生

變な音

手紙

一三〇

一三三

一三六

一三九

一四二

一四六

一五六

一六四

二九八

四〇三

四〇七

四一三

四二一

評

三山居士

初秋の一日

ケーベル先生の告別

戦争から来た行違ひ

硝子戸の中

論

作物の批評

寫生文

文藝の哲學的基礎

創作家の態度

田山花袋君に答ふ

コンラッドの描きたる自然に就いて

24

五六三

四四三

四四七

四五一

四五四

四五五

五六三

五七三

五八二

六五四

七四六

七四九

明治座の所感を虚子君に問はれて

虚子君へ

太陽雜誌募集名家投票に就いて

「額の男」を読む

「夢の如し」を読む

日英博覽會の美術品

東洋美術圖譜

客觀描寫と印象描寫

草平氏の論文に就いて

文藝とヒロイック

艇長の遺書と中佐の詩

鑑賞の統一と獨立

イズムの功過

好悪と優劣

八〇七

自然を離れんとする藝術

八二二

博士問題とマードック先生と余

八一七

マードック先生の日本歴史

八二五

博士問題の成行

八三一

文藝委員は何をするか

八三四

田中王
堂氏の「書齋より街頭へ」

八四三

坪内博士とハムレット

八四七

學者と名譽

八五三

道樂と職業

八五六

現代日本の開化

八八一

中味と形式

九〇八

文藝と道德

九二一

雜

文展と藝術

九五五

素人と黑人

九八八

私の個人主義

九九九

津田青楓君の畫

一〇三四

點頭錄

一〇三七

篇

一〇五九

入社の辭

一〇五九

元日

一〇六三

余と萬年筆

一〇六六

「幻影の盾」自序

一〇七一

浦瀨 白雨 譯 「チーヅチー」の詩序

一〇七二

「吾輩は猫である」上篇自序

一〇七三

「漾虛集」自序

一〇七五

「吾輩は猫である」中篇自序

一〇七六

「鶉籠」自序

一〇八〇

鈴木三
重吉作 「千代紙」序

一〇八二

平井著 「野葡萄」序

一〇八三

「吾輩は猫である」下篇自序

一〇八五

藪野著 「東京見物」序

一〇八六

本間久
四郎譯 「名著新譯」序

一〇八八

森田草平
長江川下江村共著 「草雲雀」序

一〇九〇

生田著 「文學入門」序

一〇九三

高濱著 「鶏頭」序

一〇九六

松根東
洋城選 「新春夏秋冬」夏之部序

一一〇七

樋口著 「俳諧新研究」序

一一〇九

森田 著 「煤煙」第一卷序

中村 畫 「不折俳畫」序

池邊君の史論に就いて

「土」に就いて

高原 操著 「極北日本」序

「社會と自分」自序

野上 八重子 譯 「傳説の時代」序

米窪 太刀雄 著 「海のロマンス」序

岡本 著 並畫 「探訪畫趣」序

「心」自序

木村 恒 譯 「南國へ」序

木下 奎太郎 著 「唐草表紙」序

植松 安 譯 「文藝批評論」序

一一一〇

一一一四

一一一七

一一二三

一一三〇

一一三三

一一三四

一一三八

一一四一

一一四四

一一四六

一一四八

一一五四

縮刷に際して

「金剛草」自序

京に着ける夕

汽車は流星の疾きに、二百里の春を貫いて、行くわれを七條のプラットフォームの上に振り落とす。余が踵の堅き叩きに薄寒く響いたとき、黒きものは、黒き咽喉から火の粉をばつと吐いて、暗い國へ轟と去つた。

唯さへ京は淋しい所である。原に眞葛、川に加茂、山に比叡と愛宕と鞍馬、ことごとく昔の儘の原と川と山である。昔の儘の原と川と山の間に、一條、二條、三條をつくして、九條に至つても十條に至つても、皆昔の儘である。數へて百條に至り、生きて千年に至るとも、京は依然として淋しからう。此淋しい京を、春寒の宵に、疾く走る汽車から會釋なく振り落とされた余は、淋しいながら、寒いながら通らねばならぬ。南から北へ——町が盡きて、家が盡きて、燈が盡きる北の果迄通らねばならぬ。

「遠いよ」と主人が後から云ふ。「遠いせ」と居士が前から云ふ。余は中の車に乗つて顛へてゐる。東京を立つ時は日本にこんな寒い所があるとは思はなかつた。昨日迄は擦れ合ふ身體から

火花^{ひばな}が出て、むく／＼と血管^{けつくわん}を無理^{むり}に越^こす熱^{あつ}き血^ちが、汗^{あせ}を吹^ふいて總身^{そうみ}に養浸^{にじ}み出^ではせぬかと感^{かん}じ
た。東京^{とうきやう}は左程^{さほど}に烈^{はげ}しい所^{ところ}である。此刺^{このし}激^{げき}の強^{つよ}い都^{みやこ}を去^さつて、突然^{とつぜん}と太古^{たいこ}の京^{きやう}へ飛^とび下^おりた余^よは、
恰^{あた}も三伏^{さんぷく}の日^ひに照^てり附^つけられた焼石^{やけいし}が、緑^{みどり}の底^{そこ}に空^{そら}を映^{うつ}さぬ暗^くい池^{いけ}へ、落^おち込^こんだ様^{やう}なものだ。
余^よはしゆつと云^いふ音^{おと}と共に、倏^{しゆつ}忽^{こつ}とわれを去^さる熱氣^{ねつき}が、静^{しづ}かなる京^{きやう}の夜^よに震動^{しんどう}を起^{おこ}しはせぬかと
心配^{しんぱい}した。

「遠^{とほ}いよ」と云^いつた人^{ひと}の車^{くるま}と、「遠^{とほ}いせ」と云^いつた人^{ひと}の車^{くるま}と、顛^{くる}へて居^みる余^よの車^{くるま}は長^{なが}き轡^{かぢ}を長^{なが}く
連^{つら}ねて、狭^{せま}く細^{ほそ}い路^{みち}を北^{きた}へ北^{きた}へと行^ゆく。静^{しづ}かな夜^よを、聞^きかざるかと輪^{りん}を鳴^ならして行^ゆく。鳴^なる音^{おと}は
狭^{せま}き路^{みち}を左^さ右^{みぎ}に遮^{さへぎ}られて、高^{たか}く空^{そら}に響^{ひび}く。か^かんから、ん、か^かんから、ん、と云^いふ。石^{いし}に逢^あへばか
か^かん、か、らんと云^いふ。陰氣^{いんき}な音^{おと}ではない。然^{しか}し寒^{さむ}い響^{ひび}である。風^{かぜ}は北^{きた}から吹^ふく。

細^{ほそ}い路^{みち}を窮屈^{きゆうくつ}に兩側^{りやうがは}から仕切^{しき}る家^{いえ}は悉^{いへ}く黒^{くろ}い。戸^とは残^{のこ}りなく鎖^{とぎ}されてゐる。所々^{ところどころ}の軒下^{のきした}に大^{おほ}き
な小田原提燈^{せだはらちやうだん}が見^みえる。赤^{あか}くせんざいかいてある。人^{ひと}氣^きのない軒下^{のきした}にせんざいは抑^{おさ}も何^{なに}を待^{まち}ち
つ、赤^{あか}く染^そまつて居^ゐるのかしらん。春寒^{はるさむ}の夜^よを深^{ふか}み、加茂川^{かもちがは}の水^{みづ}さへ死^しぬ頃^{ころ}を見計^{みはか}らつて桓武天
皇^{わうこん}の亡魂^{はうこん}でも食^くひに來^くる氣^きかも知^しれぬ。

桓武天皇^{くわんむてんわう}の御宇^{ぎよふ}に、せんざいが軒下^{のきした}に赤^{あか}く染^そめ抜^ぬかれてゐたかは、わ^わかり易^{やす}からぬ歷史上^{れきしじやう}の疑^ぎ

間である。然し赤いせんざいと京都とは到底離されない。離されない以上は千年の歴史を有する京都に千年の歴史を有するせんざいが無くてはならぬ。せんざいを召し給へる桓武天皇の昔はしらず、余とせんざいと京都とは有史以前から深い因縁で互に結びつけられて居る。始めて京都に來たのは十五六年の昔である。その時は正岡子規と一所であつた。麩屋町の柵屋とか云ふ家へ着いて、子規と共に京都の夜を見物に出たとき、始めて余の目に映つたのは、此赤いせんざいの大提燈である。此大提燈を見て、余は何故か是が京都だなど感じたざり、明治四十年の今日に至る迄決して動かない。せんざいは京都で、京都はせんざいであるとは余が當時に受けた第一印象で又最後の印象である。子規は死んだ。余はいまだに、せんざいを食つた事がない。實はせんざいの何物たるかをさへ辨へぬ。汁粉であるか羹小豆であるか眼前に髣髴する材料もないのに、あの赤い下品な肉太な字を見ると、京都を稻妻の迅やかなる閃きのうちに思ひ出す。同時に——あ、子規は死んで仕舞つた。絲瓜の如く干枯びて死んで仕舞つた。——提燈は未だに暗い軒下にぶらしてゐる。余は寒い首を縮めて京都を南から北へ抜ける。

車はかんから、んに桓武天皇の亡魂を驚かし奉つて、しきりに馳ける。前なる居士は黙つて乗つて居る。後なる主人も言葉をかける氣色がない。車夫は只細長い通を何處迄もかんから、んと

北へ走る。成程遠い。遠い程風に當たらねばならぬ。馳ける程顫へねばならぬ。余の膝掛と洋傘とは余が汽車から振り落とされたとき居士が拾つて仕舞つた。洋傘は拾はれても雨が降らねば入らぬ。此寒いのに膝掛を拾はれては東京を出るとき二十二圓五十錢を奮發した甲斐がない。

子規と來たときは斯様に寒くはなかつた。子規はセル、余はフランネルの制服を着て得意に人通りの多い所を歩行いた事を記憶してゐる。其時子規はどこからか夏蜜柑を買つて來て、之を一つ食へと云つて余に渡した。余は夏蜜柑の皮を剥いて、一房毎に裂いては噛み、裂いては噛んで、あてどもなくさまようて居ると、いつの間にやら幅一間位の小路に出た。此小路の左右に竝ぶ家には門並方一尺許りの穴を戸にあけてある。さうして其穴の中から、もしくと云ふ聲がする。始めは偶然だと思つてゐたが行く程に、穴のある程に、申し合はせた様に、左右の穴からもしもしと云ふ。知らぬ顔をして行き過ぎると穴から手を出して捕まへさうに烈しい呼び方をする。子規を顧て何だと聞くと妓樓だと答へた。余は夏蜜柑を食ひながら、目分量で一間幅の道路を中央から等分して、其等分した線の上を、綱渡りをする氣分で、不偏不黨に練つて行つた。穴から手を出して制服の尻でも捕まへられては容易ならんと思つたからである。子規は笑つて居た。膝掛をとられて顫へてゐる今の余を見たら、子規は又笑ふであらう。然し死んだものは笑ひたくても、